［エン・ブリッジ］マンスリー　1996年3月号　から

わたしのボランティア元年 第5回

異国の日本でボランティア

日本にやってきて5年の李さんは、東京外国語大学留学中に、NGO団体のAMDA(アジア医師連絡協議会)国際医療情報センターでボランティア活動を経験。それがきっかけで、研究生コースを終了とともに同センターに就職した。中国語と流暢な日本語、そして英語の3カ国語を巧みに生かしながら、李さんの日本での奮闘が続く。

――とてもお上手な日本語ですね。

「日本にきて5年になりますが、母国の台湾でも日本語を勉強していました。台湾では大学を受験すると、あとはコンピューターでふり分けられるんです。ほんとは英語学科に入りたかったんですが、たまたま日本語学科になったというか。それでだんだん日本語が分かるようになって、日本に来られるチャンスがあったら来たいなと思っていました。そうしたら、留学試験に受かって、外語大で言語学を学ぶことになりました。」

日本人というのは、信号は青になったら渡るものかと思っていました

――日本の印象はいかがですか？

「日本人は礼儀正しくて一生懸命に働くというイメージがありました。でも来てみたら必ずしもそうではなかった。たとえば、日本人というのは信号は青になったら渡るものかと思っていました。でもそんなことはなくてびっくりしました。それから東京の人は知らない人には冷たい感じがする。もちろんいい友だちも何人かできましたが、台湾では知らない人にも笑顔なんです。」

台湾では、日本に対して好感を持っている年配の方が少なくないと李さんは言う。戦争中の支配体制が複雑に作用しているようだ。

――反日感情と言いますか、むしろ嫌がられているのではないかと思いましたが。

「それは建て前というか。政治家の人たちはそういう考えをみんなに教えているけれど、実際にはうちのおじいちゃんとかおばあちゃんは、その時代が懐かしいと言います。若い人もアメリカの映画や音楽に惹かれていますが、でもだんだん最近は漫画やファッション雑誌などの力で、日本に対する興味が高まっています。」

――AMDAでボランティアを始めたきっかけは何だったんですか。

「私のおじさんも日本への留学生でしたが、そのおじさんとAMDAの所長さんが学生時代からの友人で、たまたま仕事があったときに声をかけられたのがきっかけ

です。それが在学2年目のときで、1年間ほどやりました。そして卒業のころに帰国しようと決めていたら、事務局長さんからここに勤めないかと言われまして、それでせっかくのチャンスだから、日本で就職してみようかなって思ったんです。」

――AMDAというと、昨年の阪神大震災での医療活動が印象的ですが。

「AMDAはもともと、ベトナム難民を助けようと向こうに行った医師が、実際にはなにもできなくて、それがもとでアジアの留学生を集めて組織化したものだと聞いています。アジアの15ヵ国にあるんですが、日本ではまず岡山に本部があります。そしてその中にAMDA国際医療情報センターがありますが、業務がまったく別で、お医者さんを実際に難民キャンプなどに派遣するのが本部の仕事。そして私がいるセンターでは、日本にいる外国人をヘルプする仕事をやっています。ですから内容的にはまったく違うわけです。

大震災のときには、私たちは具体的には本当になんにもできませんでした。現場に近い大阪のセンター関西では活躍する場があったようですが、私たちの東京のセンターではなにもできなくて、みんな悔しい思いをしました。」

本当に悔しそうな李さん。それでは東京のセンターでは、どのような活動を続けられているのだろうか。

「日本で暮らしている外国人からの電話相談が中心です。たとえば中国語が通じる病院を紹介してほしいといった内容のものです。かりに日本語がうまくても、病状とか病気の説明など細かいところまでは伝わりません。それで、中国語で説明してくれる病院はないかというのが、今でも一番多い相談です。

相談は月に200～300件くらいですが、中には難しいものもあります。たとえば健康保険など、日本での福祉制度が資格のない外国人には使えない場合が多いんです。具体的な対応策がないものですから、そういう質問には答えてあげられないことが多い。それでただ話を聞くだけになってしまうケースもありますが、自分の国の言葉で話すということで、少しは気持ちが落ち着くかもしれないと思っています。」

李さんのボランティア活動は台湾での高校時代にさかのぼる。近所に、忙しい親のために子どもを預かる施設があり、そこで子どもたちの宿題の手伝いをしたり、一緒に遊んだりといった経験を2年間ほど続けている。

――台湾ではボランティア活動は盛んなんですか?

「全然です。日本にやって来て、NGOが一杯あることにびっくりしました。台湾ではみんな自分のことで精一杯。ボランティアという意識はあんまりないです。AMDAのように、外国語で医療などの情報を教える機関もまだありません。私の場合は、たまたま回りの仲間が一緒にやろうということでやっていました。でも、自分自身も楽しかったですし、助けてあげるという意識はなかったですね。」

日本に住んでいる外国人の子どもたちの相談にのってあげたい

そして今も、子どもに関係したNGO活動に興味を持っていると李さんはおっしゃる。

「具体的にはまだ考えていないんですけれど、たとえば幼い難民を考える会があります。そこでは海外からの難民の子どもたちをケア、フォローしているんですが、私が思っているのは難民だけではなくて、日本に住んでいる外国人の子ども。日本に長く住む予定の人が増えていますから、そういう子どもも多くなっています。その中で教育や文化、たとえば日本語を勉強するのか中国語を勉強するのかといった悩みもあるだろうと思います。それに環境の変化の悩みもあるでしょうし、その辺でなにか手伝えたらいいなと思っています。日本人と結婚した人の国際結婚の相談の窓口はあるんですけど、子どものケアはまだ少ないんですね。行政はまずやらないでしょうから、NGOでやるしかないと思うんです。」

李佩玲（りべいりん）さん

AMDA国際医療情報センター事務局